

『鏡の国のアリス』を用いた英語教材の開発

小野 章・石原 知英*
(2011年12月2日受理)

Lewis Carroll's *Through the Looking-Glass* as a Teaching Material for Senior High School Students

Akira ONO and Tomohide ISHIHARA

Abstract. This paper aims to develop a teaching material, using Carroll's *Through the Looking-Glass, and What Alice Found There (TLG)* as its source. Chapter 6 of the book comically shows us what Humpty Dumpty thinks of words. Humpty Dumpty says to Alice, 'When I use a word... it means just what I choose it to mean - neither more nor less.' In short, Humpty Dumpty 'is to be master.' This relationship between Humpty Dumpty and words is in stark contrast to that between people and language hypothetically pointed out by two linguists, Sapir and Whorf. The Sapir-Whorf Hypothesis, according to which language controls our thought, is dealt with in a senior high school English textbook. We claim that the lesson on the hypothesis can be effectively taught with a passage from Chapter 6 of *TLG*. To help students read *TLG* in the original, 12 comprehension questions are also suggested in this paper. In addition to *TLG*, a passage by Yasunari Kawabata might enhance students' understanding of the Sapir-Whorf Hypothesis as well. The passages from *TLG* and Kawabata would contribute to 'deepening [students'] understanding of language and culture' - one of the three objectives of learning foreign languages articulated in *The Course of Study*.

1 はじめに

本論の目的は、英国の作家ルイス・キャロル (Lewis Carroll) が1872年に刊行した『鏡の国のアリス』 (*Through the Looking Glass, and What Alice Found There*) を使って、高等学校用の英語教材を開発することである。

『鏡の国のアリス』は、1865年に刊行された『不思議の国のアリス』 (*Alice's Adventures in Wonderland*) のいわば続編として書かれたものであり、両作品ともこれまでしばしば日本の英語教科書に掲載されてきた。ただし本論では、実際に教科書に掲載された『鏡の国のアリス』は扱わない。代わりに、高等学校用英語教科書中のレッスンで、同作品と内容的に関連するものを紹介し、その上で『鏡の国のアリス』の原文を基にした独自の教材を提示したい。

平成21年に公示された『高等学校学習指導要領』において、外国語科の目標は次の三つの柱から成り立っている。

- ① 外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深めること。
- ② 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること。
- ③ 外国語を通じて、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を養うこと。

このうち「① 外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深めること」に、本論が提示する『鏡の国のアリス』の教材は貢献し得ると考える。

周知のごとく、『鏡の国のアリス』は世界中で親しまれている。その理由のひとつに、言語に対する深い洞察が挙げられよう。作品タイトルが示すように、『鏡の国のアリス』は通常の世界のあり方を逆のかたちで示してくれている。同作品に描かれた言語 (あるいはそれと不可分の関係にある文化) のあり様に触れることで、反転的に「言語や文化に対する理解」が深まると期待される。

*愛知大学経営学部

2 高等学校用英語教科書 *Polestar: Reading Course* のレッスン

Appendixの資料は、平成15年に検定を受けた高等学校用英語教科書 *Polestar: Reading Course* (数研出版) から引用したものである。リーディング用である同教科書は、12のLessonに加え、ふたつのFurther Readingから成り立っている。うち、Appendixの資料は3番目のレッスンにあたる。

タイトル“Language and Thought”が示す通り、このレッスンでは言語と思考の関係が扱われている。全部で6段落から成る同レッスンを段落ごとに要約すると以下ようになる。

- (1) 言語は思考の内容を伝える手段である、と一般的には考えられている。
- (2) しかし、言語が思考そのものを左右するとは考えられないだろうか。
- (3) (2)のような言語観は「サピア=ウォーフ仮説」と呼ばれる。
- (4) 同仮説によると、母語が異なれば思考そのものも異なることになる。
- (5) 例えば、日本語母語話者なら姉と妹を区別するところを、英語母語話者は単に“sister”とのみ表現する。これは兄弟・姉妹の区別の仕方そのものの違いと連動している。
- (6) このような言語観をどう思うか。また、この言語観に即した例を他に思いつけるか。

要するに、思考の段階で既に言語が介在しているわけであるから、人は言語によって思考そのものを支配されていると言える、という言語観(サピア=ウォーフ仮説)がこのレッスンでは紹介されている。

上でまとめた通り、レッスン本文の最終段落(第6段落)では「この言語観に即した例を他に思いつけるか」といった問いかけがなされている。この問いかけは学習者である高校生に向けられたものであり、さまざまな例が挙げられることであろう。また、教師の側にも、サピア=ウォーフ仮説を基に、言語への考察を教室現場で膨らませることが期待される。なぜなら、前述の通り、言語に対する理解を深めさせることは、『高等学校学習指導要領』に定められた目標でもあるからだ。

本論では、「人は言語によって思考そのものを支配されている」という言語観に教師が教室で触れる際の、具体的な副教材を提示したいと思う。

3 川端康成の『新文章読本』

『高等学校学習指導要領』の外国語の目標には、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深める」とある(下線筆者)。しかし、外国語教育から大きく逸脱しない範囲で、教科横断的に国語を取り入れても良いのではないか。英語の他に、言語を直接的に扱う教科はもちろん国語である。国語と英語の両方から、言語の「本質」に迫ることは高校生にとって有意義なものであると考える。

次は川端康成の『新文章読本』からの引用である(旧字体は新字体に筆者が変更)。

言葉と文字の創造ほど、人類の創造物中での驚異は、他に例がないであろう。宗教では「無言」の中にさまざまな意味を見る。言葉を持たなかったころの、原始への魂の郷愁は、われわれの日常生活の中にも、散見する。しかし言葉と文字の発見によって、人類の精神と文化が無限に発達したということは言い得よう。

勿論、言葉は人間に個性を与えたが、同時に個性をうばった。一つの言葉が他人に理解されることで、複雑な生活様式は与えられたであろうが、文化を得た代りに、真実は失ったかも知れない。言葉の理解は、人と人との間の契約による。言葉を表現の媒材とする小説は、故に「契約芸術」の哀しい宿命を持たされているともいえないようか。いかように表現形式を革新しても、言語や文字では遂に完全な自由な表現を得ずに制約されている人間が、束縛者である文字や言語に対して、自由と解放を求めて拮抗して来た歴史が、文学上の新境地の開拓の歴史であったということも出来よう。(下線筆者)

やや読みづらい日本語であるが、下線部を中心に引用箇所を読み解いてみたい。端的には、作家と言葉の葛藤が論じられている。作家は言葉を駆使して独自の世界を紙面上で展開する。あるいは、言葉の使い方そのものに革新をもたらし、例えば、これまでには無かったような新しい意味を言葉に付与しようとさえする。しかし前節で触れたサピ

ア=ウォーフ仮説に従えば、人は言語によって思考そのものを支配されている。だからこそ、人間が「いかように表現形式を革新しても、言語や文字では遂に完全な自由な表現を得ずに制約されている」のだ。

言葉の巧みな使い手である作家といえども、その言葉を好き勝手に使うことは出来ない。例えば、「あなたはとても美しい人ですね」という内容を伝えるために、「あなたはとても醜い人ですね」と表現することは、特別な効果をねらう場合を除き、極めて不適切である。もちろん作家が、これまでには無かったような斬新な言葉の使い方を試みることはあろう。しかし、あまりにも斬新で、通常の使い方から大きく逸脱するようであれば、その表現はもはや他の人には通じなくなってしまう恐れがある。川端が指摘するように、作家は言葉を駆使しているように見えて、実は同時にそれに「束縛」されてもいるのだ。

以上のように、引用した川端の文章は、サピア=ウォーフ仮説の言語観を裏付けるものと言える。前節で述べた通り、英語教科書 *Polestar: Reading Course* の Lesson 3: Language and Thought では、「人は言語によって思考そのものを支配されている」という同仮説が紹介されている。教師がこのレッスンを教室で扱う際、本来ならば国語科で取り上げるはずの川端の文章に触れながら、人間が「いかように表現形式を革新しても、言語や文字では遂に完全な自由な表現を得ずに制約されている」という表現とサピア=ウォーフ仮説との関連について学習者に考えさせることは、言語に対する理解を教科横断的に深めさせることになろう。

4 ルイス・キャロルの『鏡の国のアリス』 4.1 『鏡の国のアリス』第6章におけるハンプティ・ダンプティの言語観

前節では、サピア=ウォーフ仮説を紹介した英語教科書のレッスンを教師が扱う中で、教科横断的に川端康成の文章を学習者に読ませることを提案した。しかし、川端の文章に触れさせた後は、やはり英語に立ちかえって、サピア=ウォーフ仮説に対する理解をより一層深めさせたいものである。そこで本節では、「人は言語によって思考そのものを支配されている」という言語観を教える

ために、ルイス・キャロルによる『鏡の国のアリス』の原作を教材として取り上げることを提案したい。

前述のように、『鏡の国のアリス』では通常の世界が鏡に映したごとくに逆のかたちで描かれている。サピア=ウォーフ仮説が言語の「本質」についているのだとすれば、その本質も『鏡の国のアリス』では反転させられている。次は、第6章 Humpty Dumpty からの引用である。

“I don’t know what you mean by ‘glory,’” Alice said.

Humpty Dumpty smiled contemptuously. “Of course you don’t—till I tell you. I meant ‘there’s a nice knock-down argument for you!” 5

“But ‘glory’ doesn’t mean ‘a nice knock-down argument,’” Alice objected.

“When I use a word,” Humpty Dumpty said, in rather a scornful tone, “it means just what I choose it to mean—neither more nor less.” 10

“The question is,” said Humpty Dumpty, “which is to be master—that’s all.”

Alice was too much puzzled to say anything; so after a minute Humpty Dumpty began again. “They’ve a temper, some of them—particularly 15 verbs: they’re the proudest—adjectives you can do anything with, but not verbs—however, I can manage the whole lot of them! Impenetrability! That’s what I say!”

“Would you tell me, please,” said Alice, “what 20 that means?”

“Now you talk like a reasonable child,” said Humpty Dumpty, looking very much pleased. “I meant by ‘impenetrability’ that we’ve had enough of that subject, and it would be just as well if you’d 25 mention what you mean to do next, as I suppose you don’t mean to stop here all the rest of your life.”

“That’s a great deal to make one word mean,” Alice said in a thoughtful tone.

“When I make a word do a lot of work like that,” 30 said Humpty Dumpty, “I always pay it extra.”

“Oh!” said Alice. She was too much puzzled to make any other remark.

“Ah, you should see ‘em come round me of a

Saturday night,” Humpty Dumpty went on, wagging 35
his head gravely from side to side, “for to get their
wages, you know.”

ハンプティ・ダンプティの手にかかれば、「人は言語によって思考そのものを支配されている」というサピア=ウォーフ仮説の言語観も見事に逆転され、ハンプティ・ダンプティ自身が支配者となり言語は被支配者となる（もっとも、ハンプティ・ダンプティが「人」であるか否かは議論の余地が大いにあるけれども）。ハンプティ・ダンプティの言語観を通して、逆のかたちではあるが、学習者の言語への理解が深められよう。また、前節で触れた川端の文章とは異なり、この引用箇所は英語で書かれており、学習者の英語力向上という視点からも教材に適している。さらには、前々節で見た英語教科書 *Polestar: Reading Course* の Lesson 3: Language and Thought の英語とは違って、『鏡の国のアリス』からの引用は文学作品の原文である。世界中で親しまれているオーセンティックな文章に接することで、学習動機の高まりも期待される。しかしその一方で、原文であるが故に高校生には理解しづらいかもしれない、という問題も浮上しよう。この問題には、発問等によって読みを助けるといった対策が考えられる。次項では、教師が用意しておくと思われる発問を考えてみたい。

4.2 『鏡の国のアリス』第6章をめぐる発問

前項で引用した『鏡の国のアリス』の読みを助けるための発問と、それに対する解答例を以下に提案する。

発問1：1行目でアリスはハンプティ・ダンプティが使う“glory”の意味がわからないと言っていますが、“glory”には通常どんな意味がありますか。

解答例：栄光，名誉，華麗さ，栄華など。

発問2：4～5行目でハンプティ・ダンプティは“glory”の意味を“there’s a nice knock-down argument for you!” だと言っていますが、“a nice knock-down argument”とはどんな意味だと思いますか。また、

“glory”にはそのような意味がありますか。

解答例：相手を打ち負かす，素敵な議論。

“glory”にはこのような意味はない。

発問3：8～10行目で使われているふたつの“it”は同じものを指示します。何を指示しているか英語で答えなさい。また、8～10行目を訳しなさい。

解答例：“a word”を指示している。

「俺さまが言葉を使う時は」とハンプティ・ダンプティは軽蔑の念を大いに込めて言った。「その言葉は、俺さまが好きないように選んだ意味になる—それ以上でもそれ以下でもない。」

発問4：11～12行目でハンプティ・ダンプティは「問題は、どちらがご主人様になるかだ」と言っていますが、何と何が比べられていますか。また、そのうちのどちらが「ご主人様」だとハンプティ・ダンプティは主張しようとしていますか。

解答例：言葉とハンプティ・ダンプティが比べられている。

ハンプティ・ダンプティ自身の方が「ご主人様」だと主張している。

発問5：13行目で「アリスはあまりにも頭が混乱して何も言えなかった」とありますが、彼女は何に対して混乱したのでしょうか。

解答例：ハンプティ・ダンプティが言葉を自分の手下や家来のようにみなしていることに対して。

発問6：15行目の“they”は「言葉」(words)を指示していますが、ハンプティ・ダンプティによると言葉によって気質(temper)が異なります。どのような言葉がどんな気質を持つのか答えなさい。

解答例：動詞が言葉の中でもっとも高慢であり、逆にもっとも従順なのが形容詞である。

発問7：20行目でアリスが使っている“Would you tell me, please”という表現を訳しなさい。また、それが持つニュアンスを指

摘しなさい。

解答例：「お願いだから、教えてもらえませんか」へりくだっていて、とても丁寧なニュアンス。

発問 8：22～23行目で、ハンプティ・ダンプティはアリスのことを「分別のある子」(a reasonable child) だと言いながら「とても喜んだ」(very much pleased) 様子を見せていますが、そのような様子を見せている理由を考えなさい。

解答例：20行目でアリスがへりくだった態度でハンプティ・ダンプティに教を請うていて、その態度を快く思ったから。

発問 9：18行目、24行目の“impenetrability”は通常どのような意味を持ちますか。

解答例：貫き難いこと。

発問 10：28行目で、アリスは「それは、ひとつの単語の意味にしてはずいぶんど多い」と言っていますが、彼女は具体的には何に対してそのような感想を持ったのでしょうか。

解答例：ハンプティ・ダンプティが“impenetrability”に「その話題はもうたくさんであって、次にするつもりのお前はさっさと述べた方が良く。というのも、お前も一生ずっとここに留まる気はないだろうから」という意味を持たせていることに対して。

発問 11：32～33行目で、アリスは「あまりにも頭が混乱してそれ以上何も言えなかった」とありますが、彼女が混乱している理由を述べなさい。

解答例：30～31行目で、「俺さまがそんな風に言葉にたくさん仕事をさせた時は多めに支払いをすることになっている」とハンプティ・ダンプティが言うのを聞いて、ハンプティ・ダンプティが言葉の雇い主であるかのごとくになっていると知ったから。

発問 12：ハンプティ・ダンプティの言語観と、教科書のレッスン Language and Thought で紹介されているサピア＝ウォーフ仮説の言語観を比較しなさい。

解答例：サピア＝ウォーフ仮説の言語観によると「人は言語によって思考そのものを支配されている」が、それとは逆に、ハンプティ・ダンプティは「自分が言語を支配している」という言語観を持っている。

5 おわりに

『高等学校学習指導要領』の外国語の目標には、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深めること」が掲げられている。本論で取り上げた高等学校英語教科書 *Polestar: Reading Course* の Lesson 3: Language and Thought では、言語と思考の関係がサピア＝ウォーフ仮説を中心に扱われており、まさにこの目標に合致した内容となっている。このレッスンを教えるにあたって教師が活用しうる他の教材として、本論では川端康成の『新文章読本』とルイス・キャロルの『鏡の国のアリス』を紹介した。

川端康成の文章はもちろん日本語で書かれたものである。しかしその内容はサピア＝ウォーフ仮説に合致したものであり、教科横断的に英語の授業でも扱われることで、学習者の「言語や文化に対する理解」を深める一助となろう。

『学習指導要領』は、学習者の言語や文化に対する理解が「外国語を通じて」深まることに言及している。ルイス・キャロルの『鏡の国のアリス』の第6章 Humpty Dumpty を原文で読み、ハンプティ・ダンプティの言語観（サピア＝ウォーフ仮説の言語観とは逆のもの）に触れることで、学習者は英語という「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深めること」であろう。

『学習指導要領』の目標には他に「外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること」と「外国語を通じて、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を養うこと」も掲げられている。『鏡の国のアリス』の原文というオーセンティックな教材に触れることで、学習者が「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を育むことも期待される。また、原文を読み、発問に答えること

で「情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を養うこと」も同様に期待される。

* 本論は、科研費助成事業の学術研究助成基金助成金（基盤研究費(C)）研究課題番号23520305「英語教育材料としての英文学の可能性を探る研究」の補助を受けて執筆された。

引用文献

- Carroll, L. (1998). *Through the Looking-Glass, and What Alice Found There*. In Hugh Haughton (Ed.), *Alice's Adventures in Wonderland and Through the Looking-Glass* (pp.111-241). London: Penguin Classics. (Original work published 1872)
- 村上陽介ほか（編著）（2003）.『Polestar: Reading Course』東京：数研出版.
- 川端康成（1954）.『新文章読本』東京：新潮社.
- 文部科学省（2009）.『高等学校学習指導要領解説 外国語編』.

Appendix

教科書 *Polestar: Reading Course* から Lesson 3: Language and Thought の本文のみ引用

The relationship between language and thought has attracted many thinkers for a long time. It is generally agreed that language reflects our thought. That is, when we think of something in our life as very important, we often make fine distinctions in language. One of the best-known examples of this is seen in Arabic, which has many words for “camel.” From this point of view, it is not surprising that there are various words for rice in Japanese, such as *kome*, *ine*, *momi*, *gohan*, and *raisu*.

However, do you believe that language can *control or determine* our thought? This view was

proposed by two famous linguists, Benjamin Lee Whorf, Jr. and Edward Sapir. They suggested that language is not used just to report or speak. According to them, language defines our thinking. In other words, language is not just a means of communication or a reflection of culture but a tool for thinking.

This view of language, called the Sapir-Whorf Hypothesis, is often compared to a pair of colored glasses. If the glasses are red, everything one views will seem rather red. This vision of an event will be different from the vision of a person wearing blue glasses, or glasses of any other color.

According to this hypothesis, if a speaker of Japanese and a speaker of English see the same event, they will think about it differently. For example, how would you translate the following sentence into Japanese? *My sister went to Tokyo*. Maybe you came up with something like, *Imoto wa Tokyo e ikimashita*. What is important is the word that you used to translate my sister. Did you use *imoto* or *ane*?

Supporters of the Sapir-Whorf Hypothesis would say that this example shows different thinking patterns in English and in Japanese. Speakers of English *categorize* siblings as being male or female, and that's it. Speakers of Japanese, on the other hand, not only categorize them as being male or female, but as being younger or older. This shows that the difference between older and younger is not important most of the time in English, and this characteristic *influences* the English speaker's thinking and views of reality.

Isn't it surprising if people think differently in different languages? Do you feel some truth in the theory? Let's find some other examples.